

爆発

YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆

Duo-Yamanka

爆発

山中與隆

目次

爆発

1

編者あとがき

253

爆発

作 山中與隆

1

これは、福岡の街中から車で一時間くらいの片田舎にある小さな工場に起きた悲しい事故の話である。見るからに最新鋭の設備を整えているであろう、美しい工場などとは対照的な、時代を半世紀も逆戻

りしたかのような、ひとことだけでいうとこれは、きたないボロ工場の話である。しかし、その工場の製品はユーザーの間での評価は高く、よく売れていた。

工場長は、福岡市内の本社から毎日のように車で工場に出向く。途中、広々とした芝生の敷地の中に真っ白い建屋があり、美しいブルーで、横文字の社名が大書してあり、その下には一段階小さめの字でISO9001などとある。

工場長は、美しい工場を横目で見ながら、側を通るとき決まっつて、

「あれはあれで内情は外見ほどきれいなものじやないさ。自分のところは、あれに比べたら汚らしい工場だが、肝心の製品は、長年にわたって建設業界で売れ続けていて、商品の知名度も決して低くない。これでいいのだ」

と考えるのだった。そして、丘陵が始まる辺りにひ

つそりと、木立や丘陵の起伏に隠れるようにして建っている自分の工場に向かうのである。

話をわかりやすくするため、初めにこの工場の製造工程のことを簡単に説明しておこう。それは以下の通り、いたって単純なものである。

あらかじめそれぞれ別の容器で合わせたり、煮たり焼いたりしたものを全部、十分にだしをとったス

ープがたつぷりと入っている大鍋に混ぜ入れ、煮込んで作り上げる料理を思い浮かべてほしい。

もちろんこの工場の製品は、食べるものとは無縁で、土木建設の現場で使う材料なのだが、製造工程には似たところがある。ただ、規模は巨大だから、容器とか鍋とかいったものは、何トンもの容量を持つ大きなタンクということになる。

製品は、いくつかの補助的なタンクで調合された

副材料を、メインタンクで加熱攪拌されている主原料に混合することによって作られる。分野としては一応化学工場であるが、複雑な化学反応を伴い、大きな反応塔がいくつも立ち並ぶような化学工場ではない。業界では単なる『混ぜや』と呼んでいる。

工場の中は、製造工程に合わせて変則的な三階になっている。三階にはあまり大きくないタンクが三つあり、それらで作った副材料を二階の主原料の入

ったメインタンクに自重を利用して投入できるようになつてゐる。メインタンクは一度に五トンの製品が作れる大きなもので、タンクの大部分は一階に突き出している。

出来上がった製品は、一階でタンクの底から伸びたパイプの先端から十八リットル缶に、一缶ずつ計量充填されるのである。この缶詰め作業は手動によるバルブの開閉でやつてゐる。

工場では何とか自動充填できないものかと検討を
してきたが、いまのところよい方法が見つかってい
ない。製品に粘性があることがネックとなっている
のだ。ただしネックとなっているのは粘性だけでな
く、設備にどれだけ金を掛けるかという問題もある。
五トンのタンク一バッチで二百八十缶ほどになる。
缶詰め作業だけで三時間かかる。

三種類の副材料の製造と、それをメインタンクの

主原料に投入するところまでを午前中に行う。主原料は、朝からゆつくりと攪拌しながら加温されている。投入された副材料を十分に混合するために、昼休み中も攪拌を続けて、午後一番に品質チェックをすませてから、缶詰め作業を始めるというのが通常の製造サイクルである。

これらの工程では四つのタンクが稼動するが、四つとも過熱と攪拌が重要な機能となっている。製品

は出来上がったとき温度が高いために粘度が低く、缶詰め作業はスムーズに行える。五、六十度に保たれているときの粘度は、ちようど温かいココアくらいである。ところが温度が下がると粘度は高くなり、二十度くらいでは濃い目の葛湯のようになる。そうになるとパイプから自重で落とす方法による缶詰め作業は、ほとんど不可能になる。

工場では製造のサイクルを崩さないことが重要視

されている。主原料は朝からメインタンクに仕込まれて、加温が始められる。一バツチ分の主原料は約四トン。これだけの量をタンクの底から圧入するのには一時間以上かかる。

主原料も、できあがった製品ほどではないが粘性があつて、これも温度が低いほど粘度は高くなる。主原料は高温の状態で、タンクローリーで運ばれてくる。一度に入荷する量は約八トン。メインタンク

二バツチ分である。

主原料の受け入れタンクは、加圧式の密閉型で屋外にあり、分厚く保温材が巻いてあつて、冬でも二、三日は受け入れた主原料の温度はあまり下がらない。しかし、できるだけある程度以上の温度を保つていゝる間に使い切る必要がある。仕込む主原料の温度が高ければ、仕込むのに必要な時間も、メインタンクでの加温の手間が省ける。

現場にトラブルが発生して、製造のサイクルが狂ったりすると、次に再開しようとしたとき、主原料の温度が下がってしまっていて、メインタンクに送る操作が上手くいかなくなってしまうことにもなりかねない。

さて、鉄骨スレート建ての工場内は、風通しが良くないこともあって、うだるような暑さだ。特に階

層の上の方ほど暑い。

その日、三階で副材料の製造を担当している若い工員が、現場事務所に駆け込んできた。工場に隣接した小さな休憩室では、その名の通り工員たちが休憩したり、弁当を食べたりするのだが、その四分の一くらいのスペースが簡単な衝立で仕切ってあって、工場の現場事務所になっている。そこに製造課長の平林がいた。

「課長、二番タンクの調子がおかしいから、すぐに来て」

三階にある三つの副材料製造用タンクのひとつである。

「どうした」

「温度がかからないし、攪拌機も回らない」

ここでは誰も、上司に対して丁寧語を使わない。工場の者が丁寧語でしゃべるのは工場長に対してくら

いである。

「電源は調べたのか」

「調べたさ。あれこれ調べたけどわからんから、見に来て言うとりんよ。早よう」

この若い男は特に、言葉の使い方知らない。平林は、やりかけていた仕事を中断して、若い男のあとを追った。工場内の鉄階段を二階まで駆け上がると、問題の副材料タンクの周りでは、三階の主任の山下

等が、攪拌機のスイッチやタンクの外側に巻いてある保温材に引き込まれている電熱線の状態などを調べている。彼らの作業着の背中や脇の下は早くも濡れ色になり、黄色いヘルメットのこめかみの辺りから汗が流れている。このフロアは朝からむっとうとして

「何かわかったのか」
平林が山下に聞いた。

「まだわからん。早くしないと下に送る時間がずれ込んでしまおうわ」

副材料が遅れると、その後の工程が順送りに遅れて、製造全体のサイクルが狂ってくる。当然残業ということになる。

ほとんどの工員は残業を嫌がらない。残業手当が貴重な収入増になるからである。しかし、会社側は、少しでも残業時間を減らすことを常に求めている。

そのための作業効率向上のアイデアを出した者には報奨金を出したりして、なんとか自主的に工夫や努力をさせようとしているのだ。工員たちは、QC会議では報奨金目当てにいろいろなアイデアを出す、一方で残業のチャンスは歓迎するのであった。山下が、遅れを出したら大変だと言っているのは、一つのポーズで、実際にはそんなに慌てているわけではない。二年前に課長に昇進するまでは、平林光孝も

山下たちと同じ日給制の工員だったので、彼らの心理がよくわかる。

この会社は、いまどき珍しく給料の制度が二重構造になっている。工場の工員は製造、出荷、研究室と担当が分かれていて、全部で十二人いるが、彼らは日給制である。事務課長の杉谷と三人の事務員、研究室の責任者である技術課長の中川、それに製造課長の平林が月給制ということになっている。工場

長は福岡市内にある本社の製造担当専務が兼任して
いて、工場に常駐していないが、たいてい一日に一
回は車でやってくる。

日給制の者は、残業したり休日に出勤したりすれ
ばそれだけ実入りが増えるが、月給制の課長たちに
は残業手当も休日出勤手当でも出ていない。その代
わり年末年始のように休日の多い月も給料の額は同
じである。日給制の者は、

「楽しいお休みが多ければ、給料が減る」

と言つて、月給者を妬むが、月給者は月給者で、

「夜遅くまで残業しても、休日に出ても働き損だ」

と嘆く。会社としては双方に不満の種を残してバランスをとっているのである。もちろんこの会社に労働組合はない。

平林には責任がある。トラブルの原因を見つけて、

早く製造を始めさせなくてはならない。

「ほかのタンクは回るのか」

平林の問いに、

「まだみてない」

と山下。一番と三番も副材料用だが、処理しなければならぬ副材料の量が少なく、熱湯のような高温でメインタンクに投入しなければならぬので、それらは投入直前に作る。比較的量が多く時間のかか

る二番タンクから先に始めるのだ。

山下が一番タンクの攪拌機のスイッチを入れた。ウンともスンともいわない。

「三番はどうだ」

山下が、回らなかつた一番タンクのスイッチを切りながら言うと、近くにいた工員が三番タンクのスイッチを入れる。やはり回らない。三番のスイッチを入れた工員はそのまま二番の方に来ようとした。そ

れを見た山下が、

「スイッチを切つとけ」

と命令口調で言う。工員は、のろのろと動いてスイッチを切った。

「電気が来てないんか」

山下はそう言って天井を見る。電灯は点いている。

「動力だけが来てないんだな」

いかにも理論的に問題を分析しているような顔つき

だ。平林は山下の小学生のような分析には耳を貸さずに、一階の入り口にある配電盤を調べるために降りて行った。三階の動力用の電源スイッチは入っている。山下の分析を待つまでもなく、どのフロアの電灯も点いていて、それぞれ担当の工員が作業をしている。メインタンクでは、朝から主原料が加温、攪拌され続けている。動力線も電灯線も停電などしていない。平林は、自分たちでもたもたしては

時間を食うばかりだと判断して、工場の電気系統をいつも見てもらっている近くの電気工事店を呼ぶことにした。

工事店の者は十五分もしないうちに来た。そして三階に送る動力線が途中で断線していることをすぐにつきとめた。配電盤から真っ直ぐ三階の梁のところまで壁沿いに延びた線の途中、ちようど二階の床の高さあたりで線が切れているのが見つかった。

わかつてみれば、誰でもその場を見れば一目瞭然だつたのだが、そこを調べたものはいなかつたのだ。想像しにくいことだから致し方ないであろう。電氣屋が修理して歸つたあと、いつたいどうしてそんなことになつたのか首をかしげている平林の横で、
「ねずみでもかじつたか」

と工員の一人がニヤニヤしながら言った。

「番線カッターで切つたように綺麗に切れていたん

だぞ。電気屋もカッターじゃないとあんな風には切れないと言つてた。ねずみなんかじゃない」

平林が言い終わつて振り返つたときには、その工員はもういなくなつた。平林は何故そういうことになつたのか想像も付かなかつた。いずれにしても、トラブルの原因を工場長が聞いてくるまでに見つけておく必要がある。

副材料タンク二番の加熱と攪拌が始まつたとき、

もう十時の休憩時間が近づいていた。平林が二階の断線のあたりを調べているうちに、工場内から人氣がなくなつた。十時が近づくとみんな音もなく休憩室に行つてしまふ。平林が休憩室に入った時には、彼らはもう茶をすすつていた。

「みんな聞いてくれ。今日は二時間遅れの作業になりそうだ。すまんが、昼休みを交代でしてくれないか。そうすれば、夕方の残業は一時間でいけるだろ

う」

昼休みに作業を続けても時間外手当は必要だが、半分の人数で三十分ずつすれば、五時以降に全員で二時間残業するのに比べると、手当では少なくてすむ。こんなみみっちいことを考えるのに、平林はうんざりしているのだが、工場長のねちっこい追及を想像すると、ついそういう風になってしまふのだった。

それより、断線の原因が問題だ。

「線が切れていたことについて誰か思い当たることはないか」

平林は、みなが発言しやすいうように穏やかな調子を作って言った。さつきねずみじゃないかと言った工員は、二階の作業を担当しているから何か知っているのではないかと思つたが、何も言わない。そういえば彼の名前は根住というのだった。平林は今気がついた。言われたときは、アクセントが違うので気

がつかかなかつた。絶妙な冗談を言ったものだ。平林は思わず吹き出しそうになつたが、かろうじて頬が動くのをこらえた。二階の担当は根住のほか三人いるが、誰も我関せずといった態度をとっている。二階の主任の田村も、何も知らないという顔である。平林はみんなを見回した。目が合うと工員たちは視線をそらす。何か知っているが隠している。というより、根住に気を使っているのだ。彼を怒らせると

面倒なことをみんな知っているからだ。こういうときは根住が何かを知っていると、平林は経験から得た勘で確信した。

午後三時過ぎに、平林は事務所から呼ばれた。工場長が来ているのだ。工場長は、一日に一回は本社から車でやってくる。案の定、午前中のトラブルの事を聞かれた。トラブルがあつたことを、事務課長の杉谷がすでに工場長に話していたのだ。

「動力線が切れた原因は何だ」

「それが、まだ掴めていません」

「あれだけの機械が毎日回っているのだから、あれこれ不具合が起きるのは仕方ないが、電気屋はカタールで切ったみたいだと言っているらしいじゃないか。何か、間違つて切つてしまうようなことでもしたのか」

「いや、特には」

平林は、工場長の前に出ると、何となく体が硬くなつて思考が働かなくなり、言葉も自由でなくなつてしまふ。

「あんたの真面目さを見込んで、課長になつてもらつてるんだから、しつかりしてくれんと困るじゃないか。トラブルがいけんと言つてるのじゃないんだ。状況を常に掴んでやつて欲しいと言つているんだ」

「はい。原因はいま調べています」

「ほんとに・・・カッターで動力線を切るやつがあるか・・・」

工場長は独り言を言いながら、事務室を出て行った。製造課長が目の前にいるのに、一人で勝手に工場に行つたのだ。工場長なのだから、工場に入っていくのは自由だが、トラブルのことで製造課長と話している最中に、フイツと自分だけ出て行ってしまふのが彼のいつものやり方であつた。事務室に残された

平林も、仕方なく立ち上がって工場に向かった。杉谷がニヤニヤしながら平林を見送った。杉谷は、管理能力も統率力もない平林が、ただおとなしくて真面目だというだけで課長になったと、彼のことを小ばかにしているのだった。

平林が工場に入っていくと、休憩室の方で工場長の声がしている。工場長は大声で怒鳴ることはないが、いやみたっぷり小言を言う。平林は行きたく

なかつたが、知らん顔もできないので休憩室に入つていった。

「いま何分だかわかっているのか。会社はあんたらに三十分でも仕事がのびたらきちんと手当てを出しているんだ。そのぶん、作業時間内はきちんと働いてもらわんとな」

そのとき入ってきた平林に、

「おう、課長さんよ、休憩時間も守らせられんよう

じや困るじやないか。だいたい君たちの提案で、ベルを鳴らすのをやめたんじゃないか？自主的に管理できるからということじゃないか？会社はだらだらとくだらん週刊誌を読ませるためにあんたらを雇ってるんじゃないんだ」

自分の怒りに煽られて、工場長の不機嫌はエスカレートしていく。

「しつかりたのみます」

捨て台詞のように言つて、激しくドアを閉めて出て行つた。みなはぞろぞろと作業場に向かう。ニヤニヤしながら出て行く者もいる。

平林はパイプ椅子の一つを引き寄せて、乱暴に座り大きくため息をひとつついた。おばちゃんが平林の前に茶を置いた。おばちゃんと呼ばれているが、この人も工員の一人で、名を田村と言う。おばちゃんとは夫婦で勤めていて、旦那の方は二階の主任であ

る。彼は定年間近で、できれば一年でも二年でも続けて働かせてもらいたいと思つている。彼ら夫婦は、なぜか比較的平林に好意的である。

みんなが飲み散らかした湯飲みを片付けながら、

「あの人が切つたのよ」

とおばちゃんは、つぶやくように言つた。

「えっ？」

はつきり聞き取れなかつたので、平林は聞き返した

が、おばちゃんは二度と言わなかった。平林は、やっぱりそうだったのかと思ったが、おばちゃんから聞いたとは絶対に他言すまいと思った。

作業現場でのトラブルのたびに、現場の誰からも何一つ聞き出せないことが、平林の悩みの種であった。もし、おばちゃんがもらったことがわかったら、根住の恨みを買ひ、ますます口をつぐむことになる。平林は、根住がやったというのが事実だとしたら、

どうしたらいいのか考えあぐねた。直接本人に言っても、やったことを否定するだろうし、それだけでなく、誰から聞いたのかと、逆恨みするに決まっている。平林はだまって休憩室を出た。おばちゃんにありがとうと言いたいところだったが、何も聞いていないという風にしておいた方が、おばちゃんが安心だろうと考えて、礼は言わなかった。

工場では、二階の断線のあったあたりで工場長と

根住が談笑している。根住は工場長には特別に愛想がいい。工場長も根住とは仲間のようになざつくばらんな態度をとる。そのことを根住は、自分は工場長と気が合うのだとよく自慢している。工場長の方は、工員たちは都合の悪いことには口が堅いことを知っていて、貴重な情報源として根住を利用しようとしているのだった。根住が工場長に擦り寄っていくと、ほかの者は近寄らないが、耳だけはウサギのように

そばだてるのだった。

結局、断線トラブルはそれ以上の追求もなく、日が過ぎていったが、平林の失点はひとつ増えた。平林は工場長の顔を見るたびに、何か言われはしないかとストレスの溜まる毎日であつた。

製造現場のトラブルは、このたびの断線だけでなく、過去にさかのぼれば数え切れないほどある。中には工場長自身も謎解きのように原因究明に興味を

持って、技術課長の中川を交えて取り組んだ問題もあつた。

工場長は技術の専門家を自認しており、技術的なトラブルの解決は、自分なしではできないと考えている。中川は、工場でただ一人の大学出だが、工場長は彼の技術力もあまり認めようとしない。しかし、実際に製品に関するさまざまな技術的な問題を解決しながら、品質を維持し、時には営業の要求に応じ

て製品の改良に成功しているのも彼の力であつた。
工場長はそれらも、

「俺が言ったとおりだろう」
と自分の手柄にしたがるのだった。

もつとも中川には、片手落ちの判断で現場を混乱
させることもたまにあるのだった。

断線トラブルから数か月後、ビーカーがメインタ

ンクの中に落ちて砕け、ガラスの破片が製品に混ざりこむというトラブルが発生した。試験室で製品試験を担当している工員の石野が、品質試験のためのサンプルをメインタンクから直接掬い取ろうとして、ビーカーを回っている攪拌機の羽根に当てて割ってしまった。そのはずみで製品の中に落とすたのだ。ほぼ仕上がって品質チェックを待つばかりとなつていた五トンの製品の中にビーカーの破片は、粉々にな

って混ざりこんだ。製品は摂氏六十度のどろどろの液体である。

サンプルの採取は、専用の柄杓を使うことになっているが、寒い時期である、石野は柄杓を洗う手間を惜しんで、直接汲み取ろうとしたのである。ビールカーが割れたとき二階の主任の田村は側にいた。しかし、割った本人と顔を見合わせて、

「代わりのビールカーを持ってきて早く品質をチェック

クしてくれ」

と言っただけだった。新しいビーカーを持ってきた石野に、今度は柄杓で掬い取らせた。

製品の基本データは正常だったので、そのまま缶詰め作業に移った。しかし、バルブを開いても製品の出がいつもより悪い。それも二缶目には止まってしまうた。一階の主任の小島が何度もバルブを開閉するがだめである。

「ちくしょう、また詰まりやがった。おい、ストレーナーの交換だ」

「昨日、終わったときに換えたばかりじゃないか。

一缶だけでどうして詰まるんだ」

「間違つて、洗ってない網でも着けたんじゃないんか」

「いいからさっさとやろう」

思い思いのことを言いながら、交換作業の段取りに

かかった。

製品が缶に落ちる直前にあるバルブを操作して計量充填する。そのバルブの少し上側に、フランジがあり、異物を除去するための目の細かいストレーナーが取り付け付けてある。小島は二階と三階でそれぞれの作業をしている工員たちに応援を求めて、総動員でストレーナーの取替え作業にかかった。バルブの下に計量器や製品用の缶を除けて、それらにブルー

シートをかけた。製品が飛び散ってそれらを汚してしまふことがあるからだ。バルブの下にはドラム缶を置いた。大きなメインタンクには、タンク直下と、途中にストレーナーのついた二メートルくらいのパイプの先との二箇所バルブがある。製品の缶詰め作業をするのは下側のバルブである。いまはタンク直下のバルブをしつかり閉めてから作業は始められた。

ストレーナーが取り付けてあるフランジの八つのボルトを緩めていくと、パイプにたまっていた製品が滲み出し、さらに緩めるとボルトを回していた小島の胸に黒いどろどろの製品が吹きかかった。パイプに溜まっていたものだけだったので、噴き出す勢いはすぐになくなった。そのあとは、たらたらといつまでも受けのドラム缶に落ち続ける。

ストレーナーを取り外してみると、詰まるほどの

異物は溜まっていな。ストレーナーの網目は○・七五ミリと非常に細かい。念のため、試験室で調べてもら。中川技術課長が、ストレーナーを水で洗い流して、異物だけを取り残し、その正体を見極めようとしている。

この製品は土木現場などで防水材料として使うものだが、乾燥する前は水で洗い流すことができる。中川が、洗い流したあとバットに残ったのは僅かな

ざらざらした砂のようなものだけであつた。残つたものをさらに丁寧に洗つてルーペで見ると、ガラスの粒のようにきらきら光っている。平林も結果が氣になつて、試験室にやつてきた。異物が何であるか、どうしてこんなものがあるのかはわからない。いづれにしても、詰まりの原因はこのストレーナーでないことはわかつた。製品が出てこないのは、別の何か大きな異物がタンクの底にあつて、出口をふさい

でいる可能性がある。

原因がストレーナーでなかったために、さらに大変な作業が必要になった。五トンの製品すべてを、一旦ドラム缶に抜くのである。

一階の広いフロアに二百キロ入りのドラム缶が四十本近く運び込まれた。ドラム缶で出荷する場合もある。常時百本程度の新缶の在庫がある。大きなビニール袋をすっぽりと中袋として入れたドラム

缶を、パレットに四本載せてパイプの下に置く。ストレーナーのフランジから下をはずして、タンク直下のバルブを少しずつ慎重に開いた。普通なら五トン分の圧力を受けて、製品がパイプの口から勢いよく噴き出すはずなのに、何も出てこない。やはり平林たちが予想したように、タンクの底に何かあるのだ。

この段階になる前から、ビーカーを落とした石野

と田村主任は、思い当たっていた。しかし、今更言
い出せない。それに、ビーカーがタンクに落ちたと
き、攪拌機の羽根で粉々になったと思っていたから、
割れたビーカーの破片は、ストレーナーに引っ掛か
るし、その量もビーカー一個分のガラスの破片なの
で知れている。二人ともこんな詰まり方をするとは
思わなかったのだ。

下水管が詰まったときに使う長い針金の道具を持

つてきて、先端のブラシを先のとがった金属の部品に付け替えた。それを、フランジのところからパイプに挿入して、タンクの底を突付くことにした。タンクの直径は二メートル以上あるが、深さが五メートル近くあり、タンクには幾重にも攪拌羽根があつて、底の中心にあるパイプに繋がった穴のところには、上からでは届かないのだ。

田村が下から突付くと、コツンと小さく何かに当

たる音がした。田村には、それがたまたま粉々にならずに底に沈んだビーカーの破片であることがわかった。そのままで、そのまま力を入れて二、三度突付いた。

その瞬間シュツと液体が管内を走る音がしたと思うと、田村の手元に熱い製品が噴き出した。田村は針金を抜きながら飛び下がって、土間に倒れた。タング直下でバルブに手をかけて待機していた工員が、慌ててバルブを閉めた。田村は、両腕と首から肩に

かけて製品を被つて真つ黒だ。中川がすぐに田村を抱え起こして、水道のところ連れて行つた。蛇口を一杯に開いて田村の、製品で汚れたところを洗い流した。汚れは完全に取り取れないが、洗われて見えてきた田村の皮膚は真つ赤になっている。火傷をしてゐるのだ。田村の妻であるおばちゃんも心配しながら、そばで手を貸す。ドラム缶に抜き取る作業の段取りを指示し終わった平林が水道のところに来た。

「これはひどい。病院に連れて行こう」

休憩室の電話で事務課長の杉谷に、いそいで車を持って工場の方に来るように依頼した。杉谷はすぐに来た。杉谷は田村の痛々しいようすを見て、このときばかりは皮肉や嫌味を言うことはせず、車の後部座席におばちゃんが持つてきた毛布を広げて田村を乗せた。田村は、

「だいじょうぶだよ」

と言いながらも、苦しそうである。杉谷はちらつと、総動員でドラム缶に製品を抜き取っている工場の一階の方を見たが、何も言わずに街の病院に向かった。おばちゃんが助手席に乗ってついて行った。

製品をドラム缶に抜き取るフランジのところには正規のストレーナーと同じ細かい目の金網を被せた。しかし、いちいち計量しないので作業は早い。一本

のドラム缶に百五十キロくらいの目安で入れていた。三十数ドラムになった。

全部抜き取ったあと、フランジのところを被せてあつた金網を調べた。ストレーナーを調べたときと同じように細かい、光る砂粒のようなものが少量かかっている。ただし、今度はその中に明らかにガラスとわかる大きさの粒もあつた。中川はサンプルを採りに行つた石野の方を見た。中川が問いただす前

に、石野は、

「手が滑って」

と小さな声で言った。

「サンプルを採るときに、落としたんだな？」

中川は、以前にも石野が棒状温度計の先を攪拌機の羽根に当てて割ってしまい、割れた温度計の先が製品の中に混ざりこんだことがある。そのときは、缶詰め作業に支障は起こらず、作業後にストレーナー

に割れた温度計の先端部分がそのまま引つかかっていたので事なきを得たのだった。タンクの温度を測るときには金属製のガードを温度計に付けてからすることだが、マニュアルで決まっているが、面倒なのでガードなしで製品に突っ込んで計ることが少なくないようなのである。大抵は、何事も起こらずにすんできたのであつた。

石野は、サンプル採取のとき柄杓を使わず、直接

ビーカーで掬い取ろうとしたことを白状した。中川は、これからは絶対に柄杓を使うようにきつく言った。

中川は、ドラム缶に抜き取った製品を、これからどうするかを打ち合わせるために工場に降りて行つた。三時の休憩時間に入っており、工場には誰もいなかった。平林が、休憩室にいる田村以外の二人の主任を集めて中川と四人で、これからの作業方法な

どを打ち合わせた。採るべき方法はみんなわかつて
いる。ドラム缶の製品を全部メインタンクに戻し、
ゆっくり攪拌しながら加温して、製品の温度が上が
って、缶詰め作業できる程度にまで粘度が下がった
ら缶詰めをする。おそらく十時頃までかかるだろう。
平林は、休憩しているみんなに残業の了解を求め
た。誰も異論はなかった。中川だけは、この日家族
と音楽会に行くことにしていた。ずいぶん前から楽

しみにしていたし、切符も高かった。この作業は、特に技術的な困難を伴うものではないし、これまでにも、原因は異なるが同じような作業の例がある。この度の原因は、はつきりしていて、特に製品の品質にかかわるものではない。だから自分は残業しなくても構わないのではないかと、自分で考えた。自分だけ定時で帰っていくことへの抵抗感が中川の頭の中で堂々巡りした。

「じゃあ、みんないいね」

と言う平林の言葉に、中川もしかたなく頷いた。平林は、すぐに事務所に電話して残業のことを言い、夜食を注文するように頼んだ。残業が夜の八時を過ぎるときには、夕食の弁当を支給するのが決まりになっている。

田村たちが、病院から帰ってきた。田村は痛々しく腕や顔から首にかけて包帯を巻かれていたが、夫

婦とも笑顔であつた。杉谷の説明では、火傷は軽いもので、少し水ぶくれもあつたが、皮膚が剥けるようなどころはなく、すぐによくなるとのことだつた。杉谷は、

「工場長が聞いたら、また労災のことでぐずぐず言われるわ」

と言いながら、事務所に戻っていった。労災の適用が多い会社は、労働基準監督署から注意を受け、会

社が払う労災保険料が高くなるのである。

この日工場長は工場に来なかつたので、平林は本社に電話を入れた。役員会の途中と言うことだつたが、工場長は電話に出た。平林が、事の次第をかいつまんで説明し、田村が火傷をしたこと、幸いに火傷は浅く大事に至らなかつたこと、今日は遅くまで残業になることを伝えた。

「なんだ、またか。しかし主任は、軽くてよかつた

じゃないか。まあ、気をつけてやってくれ。君たちのボーナスの査定をしていたんだが、こんなことじやあ査定を見直さんといかんかな」

最後は冗談のような調子で、今日はなんだかやけに機嫌がいい。けが人を出すような事故のときには、普通ならこんなことではすまない。工場長の上機嫌の理由は、最近工場の出荷量が多く、平林たちは追いついてられるように製造している。また会社の別部

門も好調という噂が工場にも流れてきている。きつと、賞与の会議は明るい雰囲気だったのだろうと平林は想像するのだった。それは平林自身にとつても嬉しいことである。きちんとマニユアルを守らせて、なくてもいいようなトラブルを起こさせないようにしようとして心に誓うのだった。

最後の一缶の充填がすんだときには、さすがにみな疲れたようすで、作業着を製品でベタベタに汚し

たまま、ところ構わず座り込んで一服したのだった。それから、一部のもものは後片付けにかかり、他のものは翌日の製造の準備に取り掛かった。こうして全員がひとつの目標に向かって、力をあわせて作業しているときは、しかもそれが着実に進行していると、きにはみんなの中に連帯意識が生まれて、誰もが充実した気持ちになるものである。そのような苦労の原因を作った本人は、みんなにすまないという気持ち

ちで普段より一生懸命に働く。そして、敢えて口に出して言われなくても、これからはマニュアルを守ろうと心に期するのであつた。一方ほかの者たちは、一人の仲間の失敗をカバーしているという寛大さにある種の快さを感じるのであつた。結局、その日の作業は深夜十一時頃までかかつた。

九州とはいえ、十二月に入った時期の夜は深々と冷える。

平林が予想したように、この期末のボーナスはこれまでになく多かつた。工場でも今は銀行振り込みである。朝礼で工場長から恭しく受け取ったのは、表に賞与とゴム印が押された封筒の中に、明細の書かれた細長い紙切れが入っているだけのものである。

もちろんみんな嬉しいには違いないのだが、

「月給のやつら、わしらより多かつたはずや」

「本社なんか、びつくりするくらい出てるぞ」

「こんなくらいで、ヘラヘラ喜んでたら、笑われるなあ」

などと、へらず口も飛び交った。

そんな中で、平林は自分の明細書を見て、ややシヨックを受けていた。みんなの口ぶりからすると、

全員一律ではないにしても、およそ二か月分というのが今回の相場のようなのだが、自分は一・五か月分しかない。平林は、トラブルを電話で伝えたときに、工場長が、

『こんなことじゃあ査定を見直さんといかんかな』
と言っていたことを思い出した。あのとき工場長は上機嫌そうで、平林はその言葉も冗談だと思ひ込んでいた。

「ちくしょう」

平林は、唇をかみ締めた。彼は、昼休みにふらりと試験室の中川のところに行つた。トラブルの責任を取らされたような形で、ボーナスの査定を低くされたのが自分だけなのかを確かめたかったのだ。特に今回のトラブルは試験室の担当者がビーカーを製品の中に落としたのが原因である。そもそも、製造部門と、品質管理を担当している試験室とは常に一体

となつて製品を作っているのだから、自分が負わされた責任は、当然技術課長の中川も平等に負うはずだと考えたからである。ただ平林が、ボーナスが低く査定された原因を今回のトラブルだと思ひこんでいるところに、少しずれがあるのだつた。

「二か月出るなんて、四年ぶりかな」

平林は、鎌をかけるような言い方をした。

「そうだね、いつかもっと多いことがあつたけど。」

あのときは、夏だったつけ」

と中川が言った。平林は、四年前の自分のボーナスを思い出そうとした。たしかそのときはちょうど二か月分あり、入社以来ボーナスといえれば一か月か、多くても一・二か月を超えることはなかった。驚いた記憶がある。しかし、今の中川の口ぶりだとそれ以上だったみたいだ。中川は自分より年は若い。が大学出だから給料は多いに違いない。しかし、ボ-

ナスの率まで違ふのかと思うのだった。

「平林さんも二か月くらいあつたんでしょ？」

逆に、中川が探りを入れるように言った。こういう話を工場の者と話すときは、彼も慎重である。さらに中川は、

「試験室で、あつけらかなと自分の明細を見せびらかせてる者がいたけど、そいつのは二か月分みたいだったから、だいたいそんなもんだつたんじゃない

ですか」

と言うのだった。二人とも自分自身のことは口にしない。だが平林は思い切つて言った。

「今回、トラブル分を査定されたらしいんでね。せいこいことしやがると思つてね」

「じゃあ、平林さんは少なかったの？」

「一・五よ」

「ほんとですか？それはちよつとひどいね」

「課長は？」

「どういう計算になるのか、はつきりはわからんけど」

この返答を聞いて平林は、中川技術課長は、少なくとも一・五などということとはなかつたのだと確信した。ますます腹が立ってきた。

「だけど、今回のトラブルで下げるといふのは、ちよつとおかしくない？ 仮に査定するとしても来期じ

やないですか？」

と中川は言ったが、平林の思い込みは変わらなかつた。中川は、もし本当に平林の査定がみんなより低くされているのだったら、それは今回のトラブルではなく、日ごろの管理の甘さに対するものに違いはないと思うのだった。また、今回のことだけで、○・五か月分も低くするというのは、いくらあの工場長でもしないだろう。それなら、むしろ平林ではなく

自分に責任があるのに、と中川は考えるのだった。

平林は、工員と工場長の板挟みになり、残業手当も付かないのに、帰るのはいつも最後である。ボナスの時期は、もちろん楽しみではあるが、多ければ多いでいろいろ嫌な思いをし、少なければもちろん面白くない。多い少ないといつてもこの工場のは、目くそ鼻くそそのことで、世の中にはもつともつと景気の良い話がたくさんあり、この時期歳末商戦に絡

めて、そのようなニュースがテレビに流れる。そんなのを見ている家族は、夫の持って帰ったボーナスで満足することはない。

「こんなの持って帰ったら、かあちゃんに愚痴られるのが落ちや」と、根住が言っていた。

『会社はボロ儲けしてるのに、あんたにはこれしか出さんのね』

と、根住のかあちゃんは言うらしい。どこの家も似たようなものなのだろう。一様に苦笑しながら相槌を打つのだった。それを聞いていた平林は、少しだけ胸が詰まる思いがしていた。彼の妻は、ボーナスの額がいくらであつても、必ず、

「ありがたいね。おつかれさま」

と言つて、彼を拝むようにして明細を受け取る。そして、その日の食卓にはささやかながらいつもより

も御馳走が並んでいるのである。それを考えるとなおさら、低く査定されたことに腹が立ってくるのだった。

平林は、事務所の応接室で工場長と向かい合った。「いろいろトラブルを起こしてしまつてすみませんでした」

「あんたが毎日苦勞していることは、私もよくわか

っている。決してレベルの高い連中ではないからな。みんな、高校は出ているが、どうせ一や二ばかり貫っていた連中だ。しかし、うちみたいな中小企業はそういうのしか採れないんだから、彼らを教育すると思つてやつていくしかないんだよな。まあ、難しく考えんでも、マニュアルを守らせることから徹底するんだね。中川課長とも協力して頑張つてくださ
い」

工場長は、笑顔で話した。平林は、トラブルのこを謝るためではなく、ボーナスの査定のことを確かめるために、ただでも話したくないと思っている工場長に、自分から申し出て時間をとってもらっているのだ。変にまとめられて、ここで引き下がったのでは何にもならない。

「あ、もう、ボーナスのことですが・・・」
「おお、なんだ？」

工場長の顔から笑顔が消えた。

「あのう、私の場合やっぱりトラブルで減点されたんですよね。まあ、当然だと思ふのですけど」
おそるおそるではあつたが、言葉にできて平林はホツとしながら工場長の答えを待った。

「そんなことはない。君だけに責任を押し付けるよ
うなことはしないさ。今回は、みんなが頑張つてく
れたおかげで売れたんで、威張れるようなものじや

ないけど、われわれとしても出来るだけのことをしたつもりだよ」

「ありがとうございます。みんなも喜んでいます」
心にもないことを言つて、平林は応接室を出た。工場長はすぐに電話で試験室を呼び出した。試験室では中川が受話器を取つた。

「課長？工場長だが、石野にここに来るように言つてくれ」

石野というのは、製品タンクの中にビーカーを落と
して、製造を大幅に停滞させる原因を作った試験室
担当の工員である。

「はい、先日の件でしたら、私も行きましよう」

「いや、あんたはいい。それだけでなくも忙しいだろ
うから」

何となく皮肉っぽい言い方だし、石野の直属の上司
である自分を抜きにして石野に何を言うつもりなの

かと、中川は少し腹が立ったが、いつものことだと諦めて、石野に、

「工場長が、事務所に来いと言ってる。このまえの事かも知れんが、素直に謝って来い」と言つて送り出した。

石野は、十分もしないうちに帰つてきた。

「やっぱりあのことだったか」

中川が聞くと、

「あー、ひどくしぼられた」

と言ったが、そのわりには表情も態度もケロツとしている。そういうことに懲りない男なのである。よくいえば、めったなことでも落ち込んだりしないのである。

実は、この日石野が工場長に呼ばれたのは、ビールを落としたことではなく、普段の勤務態度のことであつた。石野が来ると、工場長は杉谷に、石野

のタイムカードを持ってこさせた。工場長はそれを示しながら、石野が欠勤や遅刻が多いことを注意したのだった。

ボーナス後しばらくは、みんなの仕事に対する態度が前向きで、作業は順調に進んだ。相変わらず出荷は好調で、製造が追いまくられる状態は続いていた。

正月休みに入る前に、年始の出荷予定分を確保しようとして、一日二バツチという、早出残業で殆ど連続二十時間に及ぶ日も何日かあった。

その間、製品の粘度と、完全に乾燥したときに残る成分つまり固形分が低めに出て、再検査をする場面はあったが、いずれも再検査で基準値の範囲内に入ったため出荷に間に合わせる事ができたし、年始分の在庫も確保できた。

年末年始の休みは、七日間あった。本社ではすでに週休二日制を採用していたが、工場は無関係で、それどころかいわゆる旗日も休みではなかった。それは生産が追いつかないからというよりは、日給制のままではあまりにも手取りが減るために踏み切れないでいたのである。日給制の者が、休日出勤や残業で手にしている収入の水準を維持して月給制に切

り替えるのでは、会社としては人件費の高騰となるためやりたくなかった。かといって、その水準を下げて月給制にすることを、工員に納得させるのもたやすくはなかつたのである。

工場にとっては、文字通り盆と正月だけのゆつくりできる休みだが、前にも書いたように、日給制の者にとっては、休んだ日数分だけ収入減となる、複雑な気持ちの盆暮れ休みなのである。

仕事始めは、四日が日曜日だった関係で五日だった。工場長もこの日は早くから工場に顔を出して朝礼で、

「おめでとう」

と、言葉を交わすのが例年のことであつた。しかし、特に新年のセレモニーじみたことは何もなく、すぐに通常の作業が始まる。

工場長と杉谷事務課長は、工場にかかわりのある地元の企業や、何かと迷惑をかけている工場周辺の町内会長などへの挨拶回りをする。原料を購入している大手企業には、工場周辺の挨拶回りがすんで本社に戻った工場長が、社長とともに回る。企業どうしは、当然先方も幹部が打ち揃って関係先を回るの
で、この時期は、お互いに主だった顔ぶれのいないところを回り歩くことになる。訪問先で、

「あいにく、社長は挨拶回りですて」と言われれば、

「どうぞ社長さんによるしくお伝えください」と言つて、早々に引き上げることができると。たまたま社長が在席中に行き合わせてしまうと、応接室に通されて茶でも出され、十五分や三十分は雑談をしないわけにはいかなくなる。前年何らかのことで迷惑をかけたような会社に限って、顔を合わせる羽目

になるものである。そんな場合は、昨年のお詫びから始めなくてはならない。この、お互いに留守を狙ったように出かけていく年始回りは、一見不合理で滑稽に見えるが、実は非常に合理的なのである。中には、本当はいるのに、挨拶回りに出ていることにして、居留守を使う会社もあるくらいだ。目ざとい杉谷が、帰りの車のハンドルの握りながら、

「社長の車ありましたね」

などと言つても、工場長はまったく気にしない。

新年の初製造作業が始まっている工場では、

「トラブル初めや」

などと言いながら、早くもどたばたしていた。

主原料は必ず休日前には使いきり、休み明けの早朝にタンクローリーで入荷する。これは、この日のような長い休みのあとも、普段の月曜日と同じであ

る。たいてい田村主任が一時間早く出勤して主原料受け入れの段取りをする。

このことで、主任だけが、毎週一時間の時間外が必ず出来るといっていやみを言う者がいるのだから、面倒なものである。時間外の付かない平林が田村に、代わろうと言ったことがあるが、田村は遠慮したのかどうかその申し出を断った。平林は、時間外手当のことがあるので、それ以上言えないでいるのだつ

た。

新年初出のこの日も、そのようにして作業が始まったのだが、副材料の投入をすべて終えたメインタンクの状態がおかしい。田村が、

「ちよつと泡が目立つけど、見てもらえるかね？」
と、平林のところへ聞きにきた。平林が見に行くと、メインタンクの中は確かに泡が多い。平林は、柄杓

で泡のように見えるものを掬って指先で摘んでみた。泡のように見えたものは、泡ではなく硬いブツだ。直径五ミリくらいのもものから、砂粒ほどの小さなものまで無数にある。

「これ、原料の段階では無かったのか？」

平林が聞いたが、田村は、

「気がつかんかったなあ」

と、注意深く見てきたのかどうか怪しいようなあい

まいな答え方をした。

「またおかしな材料入れていきやがったか」
根住が吐き出すように言った。

これまでも、主原料をメインタンクに仕込んだ段階で、このような状態になったことがあった。すぐにメーカーに連絡して、主原料を納入しなおさせたこともある。空のタンクローリーで、メインタンクに仕込んだものと原料タンクに残っている主原料

をすべて抜き取り、新たに運んできて入れなおすのである。そうすることで、問題は収まつてきた。

メーカー側は、自分のところの製品、つまりこの工場にとって主原料となるものに初めからブツが混じっていたとは認めなかつたが、タンクローリーの洗浄が不十分だった可能性があると、黙って入れ替えに応じた。しかし、クレームに懲りたメーカーは、次に納入する主原料を、事前に十八リットル

缶で試験室に持ち込み、チエツクを受けてから納入する方法をとり始めた。これによつて、初期的な主原料の品質不良とするクレームはなくなつた。

今回のように、製造工程が進んだ段階で、メインタンクの中の状態が不安定になるといふトラブルが発生したこともあつた。

そのときは、主原料メーカーだけでなく、副材料メーカーも含めて原因を探つたが、これといつた理

由はわからないままであつた。工場長も中川も主原料が、何らかの理由で不安定になつていゝるものと見ていた。それは、主原料がエマルジョンという状態のものであることから、化学的にも場合によつてはあり得ることなのである。しかしメーカーに責任を取らせるだけの証拠を示すことが出来ず、お互いに品質管理には細心の注意を払うといふことで決着させたのであつた。

平林はすぐに中川に相談した。

「やっぱり、今朝の原料が悪かったのかね」

平林は、その可能性も有りと思つたようだが、中川は、平林が指先に付けてきたブツを見ただけで、原因がわかつたのだつた。

今朝入荷した主原料は、すでに中川自らがした検査で、異状のないことがわかっている。中川は昨日

の日曜日、ひとり出勤して、連絡を受けていた主原料のサンプルを受取り、試験をすませていたのだ。

メインタンクに散らばっているブツは、休暇中に原料タンクの底に僅かながら残っていた主原料が固まってしまい、その上に、今朝熱い主原料が入れられたため、それが軟化したのである。原料タンクからメインタンクへの主原料充填は、圧搾空気による圧入である。そのときに軟化した主原料の固まりが

千切れながら、メインタンクに入つたのである。正確に言うと、本当に固まつてしまつた部分と、固ま
りかけている部分とが混在した状態で原料タンクの
底に残っていたものが、メインタンクに送られて全
体に散らばつたのである。

メインタンクでは、製造の間ずっと加温しながら
攪拌機が回っているから、入り込んだ塊状のものは
さらに細かくなつて全体に分散したのである。

中川は、過去にクレームをつけてメーカーに納入しなおさせたものも、実は今回と同じ原因で、主原料が悪かったわけではないと考えるようになっていた。

さて、ブツが出来た原因ははっきりしていても、その製品の処置は厄介である。

実は、これは避けられないトラブルではなかった。

普段の日曜日一日だけの休みでは、同じように主原料の残りがあつても、密閉された原料タンクの中で固まるところまではいかない。月曜日の朝、熱い原料が入ってくると、その中に均一に混ざりこんでしまうので何の問題もない。

しかし長い休みの前には、完全に原料を空にしておく必要があつたのだ。それには、原料タンクの上部にある直径一メートルほどの点検窓のボルトを外

して、高圧の蒸気でタンク内を洗浄するのである。マニユアルにはちゃんとそう書いてある。しかし、この年末は非常に忙しく、仕事納めの二十八日も十時まで残業だった。

平林の頭に、原料タンクの洗浄のことが無かったわけではないのだが、夜遅くまで残業して疲れ切った工員たちに、さらに気温が下がった工場内での洗浄作業を命じるに忍びなかったのである。洗浄作業

は、作業着だけでなく顔も頭も、そして露出した部分だけでなく下着までもがベタベタに黒く汚れる。年末は連日の製造で、原料タンクの主原料の回転はきわめて頻繁であつた。このようなきには、タンクが空になつたときの残量も少ない。平林は、そう考へて洗淨をせず、正月休みに入る決断をしたのだつた。そのとき中川が、

「原料タンクはいいの？」

と平林に耳打ちしたが、平林が頷くと、中川もそれ以上何も言わなかった。あるとき、夜が遅くなつていても、平林が指示すればみんなは洗浄作業をしたはずである。平林は、まだみんなが作業をしている夜の八時頃、本社にいる工場長から電話があつたことを思い出した。

「遅くまでご苦労さん。最後になつて事故がないようにお願いしますよ。戸締りも落ちがないように」

そしてさらに、

「原料タンクの方も大丈夫だな。年明けにすぐ原料が入ることになっているから、たのみます」
と言った。そのとき平林は、

「はい、大丈夫です」
と答えたのだった。

平林の、よくいえば部下に対する優しさのようにも見えるが、仕事の上では甘さであり、彼自身の気

の弱さでもあるのだ。それがこの結果を招いているのである。それには洗淨しないことを簡単に同意したことになる中川も同罪である。

工場では主任以上が集まって対策を話し合った。製品そのものの品質には関係なく、要はどんな小さなブツも出荷する製品の中に入らないようにすれば問題ないのだ。缶詰めするときのストレーナーをさら

に細かい目のものにするということにした。ストレーナーの目を細かくすると、缶詰作業に時間がかかるが仕方ない。

缶詰め作業は三時の休憩後に始まった。予想通りのロウペースである。粘性のあるものが非常に細かい網を通過するのでひどく時間がかかる。一缶十八キロ入れるのに普段の二倍から三倍かかった。おま

けに、すぐに殆んど出ないという状態になるので、しばしばストレーナーの交換をしなければならなかった。通常なら、一バッチ分二百八十缶を充填する間にストレーナーの交換をすることは殆んどない。一日に二バッチ製造するとき、二バッチ目の途中で、出が悪くなつて交換することがたまにあるくらいである。

作業は遅々として進まなかつた。七時に一旦休憩

して夕食弁当を食べた。夕方から気温が下がって、冷え込みのひどい夜になった。製品の温度が下がる
と粘性が高くなつてさらに出が悪くなる。夕方以降、
いつもよりメインタンク内の温度を高め設定した。
この工場のタンクは、どれも加温する装置が施して
ある。加温の方式は、タンクの大きさや使用目的、
必要温度などによつて異なる。メインタンクと三階
にある副材料タンクのひとは、タンク自体が二重

になつていて、その二重の十センチほどの隙間に水を満たし、その水に高温蒸気を吹き込んで暖める方法をとつてゐる。この二重のタンクのことをジヤケツト付きタンクと呼んでゐる。これだとステンレス製のタンク内壁面に接してゐる材料が百度以上の高温に触れる心配がない。

平林は中川と相談して、通常五十度から六十度に設定してゐるメインタンクの温度を、約十度高めて、

七十度前後になるようにした。

作業中、中川は気になって、ストレーナーが交換されるたびに、そこに引っ掛かっているものを丁寧に調べた。軟化してべっとりとしたものが網にへばりついて目詰まりを起こしている。その中に、硬い砂粒のようなものも混じっている。べっとりしたのも、砂粒状のものも、どちらも主原料の固まったものであった。缶詰め作業は日付が変わりそうな時間

までかかったが、何とか終えることができた。

翌日の主原料の仕込みは、変則的な方法となった。原料タンクから圧送されてきた主原料は、メインタンクの底から押し上げるようにして充填されるが、それでは昨日と同じことになるので、メインタンクの底に繋がっている原料パイプからではなく、別のパイプをつないでタンクの上から充填することにし

た。パイプの先には目の細かい網を被せた。網には見る見るうちにべったりしたものやブツ状のものが溜まっていく。

休み中に原料タンクの底に残っていた量は、新たに入荷した主原料の一パーセントにも満たないはずである。それどころか〇・一パーセント以下かも知れない。しかし、それが液全体に混ざりこんで散らばってしまったら、無限にあるように見えるものであ

る。

平林も、中川も今回のことで、今更のように、あらゆる段階をきちんと踏んでいかないと大変なことになるものだと思ひ知るのであつた。

前の晩、遅くまで残業した者も平常どおり出勤してきている。試験室では、早速前日缶詰めされた製品の最終検査が行われた。この検査は、缶詰め作業の中間付近で、約一キロのサンプリングをして、す

べての項目の検査を行って、出荷の適否を決めるものである。この検査で、出荷できないというような結果が出ることは、あつてはならないことである。

中川は、検査する石野の手元を心配そうに見ている。石野は慣れた手つきで、検査を進める。検査項目のひとつに、ガラス棒を使つて製品をガラス板上に伸ばして、製品の滑らかさなどを調べるためのものがある。いかにも単純そのものの検査だが、どん

な大工場でもエマルジョン製品では必ず行われる試験である。

石野が、ガラス板に伸ばそうとすると、たくさんの小さなブツが邪魔をして滑らかに伸ばせない。正常なものなら、微かに色の付いた透明の薄膜を伸ばしたような状態になるはずなのである。中川は、すぐに自分でもやってみた。石野の結果と同じである。中川は、ブツのないところを選んで、伸ばしてみた。

エマルジョンはきれいである。問題は、ブツの存在だけであるが、これでは製品として出荷することは出来ない。中川の心配は的中してしまった。

そのとき、平林と工場長が試験室に入ってきた。

工場長は昨日のことを、今日工場に来て初めて知ったのだった。中川の顔を見るなり、

「工場に来るたんびに何かあるじゃないか。本社から来るとき工場が近づいたら、何かありやせんかと

心配になつてくるわ。製品は大丈夫なんだろうな」

「それが、出荷できません」

中川が答えた。これには、工場長より先に平林が口を開いた。

「いったいどういうこと？ 缶詰めには手間取つても、あれなら大丈夫つて、中川さん言つたじゃないですか。途中で温度が下がらんようにもしたし」

「それがいけなかつたらしいのです。液温が高かつ

たので固まっていたブツがやわらかくなりすぎて、網を通り抜けたらしいのです」

中川は工場長に向かつて言ったが、平林がまた言う。「あんなに細かい目をすり抜けることがあるの？そうじゃなくて、あとから塊が出来たつていうことはないの？」

中川は返事をしない。工場長は唇をかむようにして、何事か思案している。工場長の偉いところは、工員

をねちつくく叱ることは誰もが恐れているのだが、この優先順位を間違わないというところである。担当者たちの手落ちが重なって大きなトラブルに至っていることは承知のうえで、いまは彼らを叱ることよりも、この場を切り抜けるための策を考えることを優先しているのである。ブツが混じりこんだ五トンの製品をどうするか、原価にして約百万円の損失を如何にして最小限に食い止めるか、注文を受け

ている出荷は間に合うのか、工場長は頭をフル回転させていた。その間しばらく、みんな無言であつた。

工場長は、口を一文字にしたまま、何も言わずに試験室から出て行ってしまった。

三十分くらいして、中川、平林、杉谷は工場長に呼ばれて事務所の応接室に集まつた。三人が揃うとすぐに工場長は口を開いた。

「ご苦労さん。昨日できたおしやかの製品は、とり

あえずそのままにしておいて、今日の製造を進めてくれ。中川君は、今メインタンクに仕込んである主原料に塊が混じってないか十分に調べてくれ。タンクから採ったサンプルは、常温まで冷やしてから検査するように。万が一ブツがあるようだったら、それは全部ドラム缶に抜いて、新しい原料をとってから製造にかかることにしよう。いずれにしても、次の主原料受け入れまでに、原料タンクの洗浄をやっ

てくれ。平林君いいね」

考えたことをてきぱきと指示する自分に酔っているかのような流暢さである。笑みさえ浮かべながらの指示であつた。しかし、かしこまつて聞いている三人は、あとこのままではすまないことがわかつているので、工場長と同じような気分になることは出来ないのだつた。発言するきっかけを待っていた中川が、

「メインタンクに入れた主原料は、タンクの上から細かい網をかけて入れましたから、大丈夫です」と言うのと、工場長はやや声を荒立てて、

「念には念を押すんだ。あんたは百万円のおしやかを出しても、まだそんなのんきなことを言っているのか」

と一括した。中川はそれ以上何も言わなかつた。

仕込み段階で細かい網をかけた次のバッチは、再

度の原料チェックも問題なく、きわめて正常な製品ができた。平林や田村たちは、缶詰め作業が進められていく間に、原料タンクの洗浄を行つた。

その翌日早朝から、洗浄されたばかりのタンクに原料が入り、トラブルでの遅れを取り戻すべく、フル回転の製造が始まった。

数日後工場長から、ブツがあつても構わないとい

うユーザーが見つかったので、例の製品を全部ドラム缶に入れ替えておくように、そしてユーザーが自分のところのトラックでそれを取りに来るから、積み込んでやってくれとの指示があつた。ただし、それに使うドラム缶は今日のうちにそのユーザーが持つて来るそうだから、それを使うようにとの指示であつた。

「捨てる神あれば、拾う神ありだ。ここ、ここ」

と言つて、得意顔で工場長は自分の頭をひとさし指で突付いて見せた。

「ブツの入っていた缶はどうしましたよか」
平林がおそるおそる聞いた。缶の内側は製品で汚れているし、缶の内壁面にはブツも残っているだろう。平林としては、潰して産廃業者に持つていかせたいところだが、トラブルのあとだけに用心深く工場長にお伺いを立てたのだ。

「うーん」

少しの間、工場長は唇をかむようにして窓の外を見ていたが、

「洗えんことはないだろう？」

意見を求めているような言い方だが、工場長の場合にはほぼ命令に近い。缶の口は、五インチ缶といつてかなり広い。

「はあ、でも二百八十缶ですから・・・それに天の

裏側なんかはきれいに洗いにくいですけど」

「ぴかぴかにすることはないさ。あらかた黒いのがとれたらいいんだから。面倒かも知れんがそうしてくれ。あれでも全部で六万からするんだ」

工場長は、最後は、金額で締めくくることが多い。

この場合、柄の付いた噴射機で高温の蒸気を吹き付けて洗うのだが、小さな缶の内側ではあるし、こびりついた製品はすぐに乾き始める。一缶一缶時間

がかかる作業である。しかし、工場長の追い討ちがかかった。

「手分けして昼間のうちにやってくれ。明るいときの方が汚れがよく見えるだろう。製品のおしやかで、その上残業代をがっぽり払わされたんじゃ、会社は上がったりだからな」

残業にならないようにやれという指示である。

その日の午後、ペンキを塗りたくった不ぞろいなドラム缶が工場に届いた。ペンキは、元の会社名や製品名を消すために、ドラム缶全体を塗りこんでいるのだが、平林たちはこんな雑に塗装したものを見るのは初めてだ。いくら再生缶といっても、金を出して買うものは、もう少しは体裁をつけてあるのが普通である。ペンキの色も運び込まれた三十缶のうち二十缶ほどは緑色だが、あとは黄色、黒、青と

色とりどりである。ドラム缶をトラックから降ろすのに立ち会っていた杉谷も心配になったのか、本社に帰った工場長に電話した。工場長からは、ユーザ―が持ってきたのだからそれでいいという返事があり、ブツの製品の入れ替え作業が始まった。二缶ほど底のかしめ部分から製品が滲み出すものがあり、工場にあつた空きドラムと取り替えて使った。まともな缶であれば、漏れた部分を溶接して使えるのだ

が、この場合ペンキの下は錆びかけていて、すでに溶接に耐えない状態であつた。

「こんなのをよく見つけてきたものだわ」
工員たちはみなあきれた。

それから何日かして、ポンコツのようなトラックが、ブツ製品を詰めたドラム缶をどこかに運んでいった。

杉谷は時々、昼休みに休憩室に来ていた。休憩室の隅には、誰が持つてくるのか古い男性週刊誌が山積みされている。それを読みに来るのだ。そんなとき、工員たちと、お互いが小耳に挟んだ噂話をすることもよくある。

杉谷は立場上、本社の情報に詳しい。工員たちは常に、本社のやつらは、自分たち工場の者とは違って、何につけても恵まれた待遇を受けていると思ひ

込んでいるので、本社の情報には小さなことにも関心を示す。

以前、工場に回転式のキャスター付き事務用椅子が二十脚くらい持ち込まれたことがある。工場長が自らトラックを運転して運んできたのである。中古の椅子だったが、それまで折りたたみ式のパイプ椅子を使っていた工場では、みんな座のやわらかい回転椅子を喜んだ。しかし、いずれもかなり使い古さ

れていて、背もたれのバネが壊れかけていたり、キヤスターが転がらなくなっていたりしているものもあつた。

実は、その回転椅子が工場に来たころ、本社では事務椅子がすべて更新されたということがわかった。杉谷によれば一脚四十万円もする椅子だそうだ。つまり、本社が椅子を更新したために不要となった古い椅子を、工場の待遇改善と言って、おそらく壊れ

て本社の倉庫に投げ込んであつたものまでひっくりめて工場長が持ち込んだものだったのである。それを聞いた工員たちは、

「本社のイモ姉ちゃんの屁が染み込んだような椅子に座れるか、工場はゴミ捨て場か」

と言つて腹を立てた。はじめ喜んで程度の良さそうなのを取り合つていた工員たちも、すっかり回転椅子への興味を無くして、今では、キャスターがひと

つ取れてしまった椅子が工場の片隅に放置されて埃をかぶっていたりしている。しかし、一か月くらいしてから事務所にも、杉谷が一脚四十万と噂していたのと同じものらしい椅子が配備された。たまたま工場に来た営業部長が、本社のお古の椅子で仕事をしている事務員を見て、差別だと社長に噛み付いたのがきっかけらしい。その営業部長も、ユーザーを案内して工場を見にくることはあっても休憩室には、

足も踏み入れられないし、工員の椅子などには関心を示さなかつた。汚れた作業服の工員たちがどんな椅子に座つていても、差別とは感じなかつたであらう。もちろん作業現場に高級な事務椅子が向かないことくらい、誰でもわかつているが、工場のトイレも流しも、最も粗末なものが使われているし、工員用の更衣室には、汚れ仕事が多いにもかかわらずシャワーもない。

話が横道にそれたが、そういつた杉谷情報によると、ブツでおしやかになつた製品は、正式には廃棄扱いにされたのだが、工場長はどういうルートかわからないが、買うという相手を見つけて売りつけたらしいのだ。それで得た金は、全部工場長が懐に入れたという杉谷の尾びれもついた。工場長がすることは、どうせそんなことだと、特に驚く者もいなかつた。

空になつた十八リットル缶の洗淨が始まつた。寒い屋外での作業だが、高温高压の蒸気を吹き付けるので、油断すると火傷をするし、飛び散つた汚れでみな真つ黒になる。カツパを着ての作業だが、露出している部分は悲惨な状態になる。墨を顔に塗りあう祭りがあるが、みんなそんな顔になつて作業している。しかしお互いの顔を見ても、笑う者はいない。

むしろ惨めでさえあるのだ。休憩時間になつても、汚れたままでは休憩室にも入れないので、そのままそこいらに座り込んで休憩した。おばちゃんが茶を運んできて、みんなに配つた。熱い茶は嬉しかったが、なんだか灯油の臭いがする。しかし、みんな何も言わずに飲んだ。おばちゃんは、蒸気洗淨のすんだ缶の外側を、ひとつひとつ丁寧に、灯油をつけたウエスで拭く作業をしているのだ。長い時間の作業

で染み付いた臭いはちよつと手を洗ったぐらいでは
のかない。きつとおばちゃんは、灯油の匂いがする
手で、今夜の田村家の夕食を準備することになる。

茶をすすりながら、

「たった六万をケチって、俺たちにこんな仕事させ
やがって・・・残業にもならんかったら、只だから
な」

誰かがブツブツ言ったが、みんな同じ気持ちだった。

原料タンクの洗浄から、汚れ仕事が続いている。

「風呂に入っても、襟から入った汚れなんかとれやせんからなあ」

「髪の毛のべたつきがかなわん。何回洗ってもだめや」

「この手でメシ食つてると、気持ちが悪くなつてくるぞ」

そう言って、真つ黒く縁取りされたような爪を見せ

る者もいる。平林は、自分も体中べたついていると言いかけたがやめた。みんなの調子に合わせて、そんなことを言おうものなら、

「だいたい誰のせいでこんなことになったのだ」と責められるに決まっていると思つたからだ。平林は、どうしてこんなことばかり繰り返すことになるのだろう、正しいと思うことを、もつと毅然としてみんなに指示できるようにしないと、また何かが起

きることになる、と反省するのだった。

夏になつても、製品の好調な売れ行きは続いており、工場では相変わらず追いまくられるような作業が繰り返されていた。

大きなトラブルはなく、製造は順調に見えていた。

しかし、中川は、密かに心配を抱えていた。春以降、暖かくなるにしたがって、製品の固形分が低めに出ることが多くなっていたのである。再検査などでかろうじて基準値におさまるものの、常に低めであることが気がかかりであった。粘度も低めのことが多い。これは、副材料で調整をするので、製品としては一応正常な粘度で出荷できている。さらに、中川は不思議なことに気がついた。製品の検査結果を製造日

の順に並べてみると、月曜日の製品の固形分が特に低めの傾向を示しているのだ。そう言えば、正月明けの、例のブツだらけの製品の固形分は、やはりかなり低かった。あの時はおしやかとしてその処理や、善後策でバタバタしていて、検査結果をあまり気にしなかった。それに結果的に正常な製品としての出荷はなかった。一応検査はしてあったが、検査台帳のその製品の欄には『不良品』というマークが

つけられて、そのデータのひとつひとつが問題にされることはなかったのだ。

中川は、主原料のメーカーに、事情を話して何か思い当たることはないか尋ねた。これまでトラブルのときや、製品の改良のことなどで中川とは顔なじみで、親しくもある先方の技術担当者は、主原料は五十トンタンクからタンクローリーに抜き取って、納入しているのです。月曜も火曜も同じバッチだから、

月曜分だけが固形分が低いということはないという返事であった。中川も、受け入れる主原料の事前検査は続けられていたから、その回答は聞くまでもないことではあった。原因がわからないまま製造は続いていった。

三日間の盆休みが明けた日の製造で、中川の心配していたことが、明瞭な形で現れた。

六十パーセント以上と決められている製品の固形分が、五十五パーセントそこそこしかなかったのだ。これはもう再検査で基準内の数値が出ることを期待できる測定誤差の範囲を超えている。これ以上自分だけの心配にしておけないと思った中川は、平林と杉谷に、この製品を出荷停止にするよう指示した。そして平林とともに工場長に事情を説明して、原因の特定と対策を相談した。

「そんなに前から気がついていたんなら、どうしてもっと早く報告せんのだ。課長がひとりで抱え込んでる間に、傷が広がったんじゃないのか」

開口一番、工場長は中川を叱った。しかし、中川はこの工場長の言葉で、ハツと思いつくことがあつた。「傷だ。傷かも知れません。すぐにみんなでタンクを見に行きましょう」

平林と工場長は、はじめ中川が言っていることが飲

み込めなかつたが、とにかく二人は工場に向かった。製造が止まっている工場はがらんとした感じである。工員たちは手持ち無沙汰で製品の缶に貼るラベルの在庫を数えたり、工具類を整頓したりして、仕事をしているような格好をしていた。

偶然にも工場ではほかの作業が入っていて、この日は次の主原料の仕込みがなかつた。メインタンクは空の状態である。三人はメインタンクを覗き込ん

だ。中川の予想では、タンクのどこかから、ジャケツトの加温用の水がタンク内に漏れ出しているのではないかというのである。タンクは深く、攪拌用の羽根が何重にもある上に、製品で真っ黒くなっている。懐中電灯で照らしても、それらしいものは何も見えない。

「そんなんじや駄目だ。投光機を持って来い」
工場長が、周りに寄ってきてきていた工員に命じた。根

住が素早く投光機を取りに走った。工場長は、関心ありげにそこにいる者たちに、

「君たちは、いいから仕事してくれ。こんなときにしかできないことがいくらでもあるだろう。あんたらがボサツとしていても、会社は一時間幾らかを払ってるんだからな」

投光機がセットされ、三人はふたたびタンクの中を覗きこんだ。やはり、よく見えない。

「中に入ってみようか？」

根住が工場長に言った。

「おう、入ってくれるか」

根住が、すぐに入ろうとしたが、工場長は制止して、田村に二階の動力の主電源を切ってくるように命じた。工場長は、このあたりのことにはさすがに落ちがない。万が一何かの弾みで、根住が中にいるときに攪拌機が回りだしたら、根住は体中の骨が砕けて

死んでしまふ。さらに工場長は、タンクの下バルブも開放するように支持した。酸欠にも気をつけたのだ。

主電源の方は、製造がないので入っていないが、田村がタンクのバルブを開放したとき茶色の水がザザッと落ちたのを、彼は気にしなかつた。

懐中電灯を首から提げた根住が、攪拌羽根が作る狭い三角形の間を、何段にもなっている羽根を梯子

代わりにして降り始めた。

「暖かいわい」

根住が言う。昨日の製造で加温した温もりがまだ残っているのだらう。根住が、自分がいる狭い範囲を上から下まで調べ終わると、上にいる者が、根住がつかまっている羽根を手で少し動かして、次の範囲を上から下まで調べる。このようにして調べていくうちに、一番底の方で身をよじるようにして調べて

いた根住が叫んだ。

「あつ、ここだ。水が出てる。こびりついてる膜が少し膨れてて、その破れからだ」

「膨れてる膜を剥がしてみろ」

上から工場長の声が飛ぶ。

「ああ、これだ。溶接のところにも穴があるみたいだ。

水が出てる。タンクの底にも少し水が溜まっているわ」

「よし、わかった。ついでに残りも全部調べてくれ」
工場長の声に、田村たちはまた羽根を少し動かした。
結局、水漏れが見つかったのは一箇所だけだった。
早速水漏れ箇所を溶接で修理することになった。

長年製品を作り続けているために、製品が黒い被膜となつて、タンクの内側を満遍なく覆っている。その被膜は薄いものだが、すっかり乾燥していて、水に溶けない成分になっている。それ自体は、製造

の際に主原料や製造過程にある製品が、百度近いステンレス製のタンクの内壁面に直接接触れるのを避ける緩衝材の役割を果たして好都合なのである。しかし、今回水漏れ箇所での修理のために、その被膜を除去することになった。被膜のために発見できなかった水漏れ箇所がほかにもあるかも知れない。そのためにも被膜の除去は必要なことである。しかし、まだ多少でも水分を残している状態であれば、高温

高圧の水蒸気で洗淨できるのだが、完全に水分が無くなつたものは高温で少しやわらかくなることはあつても、洗い流すことはまったくできない。これがこの製品の防水材、防湿材としての特徴でもあるのだから当たり前のことである。では、どうやって除去するかというと、タンクを、製造のときと同じように加温して被膜を少しやわらかくしながら、ヘラで擦り取るのである。被膜の除去がいかに大変な作

業かを、三十年間この製品と付き合つてきて知つて
いる田村が、

「除去は溶接ラインのところを幅十センチくらいで
いいかね」

と平林に確めた。平林はそれでいいと指示した。し
かし、工場長がそばから、

「だめだ、前面除去しなくちゃだめだよ。君らは、
またおしやかを作りたいのか」

と言つて覆したのだった。結局、溶接してある二ラインだけでなく、全内壁面の除去をすることになった。部分的に除去すると、残っている被膜とステンレス面との僅かな隙間から原料などが染み込んで、被膜の切れ端が製品に混ざりこむ恐れがあるからだ。

作業は難渋を極めた。五、六十度に加温された、身動きも自由にならないタンクの中での作業だ。中

に入った者は十五分と連続して入っていることがで
きず、次の者と交代した。上がってきた者は、まる
でサウナから出てきたように滝のような汗を流し、
用意されている冷たい水をがぶ飲みした。ようすを
見に来た工場長が平林を叱るようにして指示した。

「何やってるんだ。どうして風を送らないんだ。死
んでしまおうぞ」

平林は、ハッと気がついて、大きな扇風機を持って

こさせようとした。どうして、こんなことを言われなくて気がつかないのだ。自分が情けなくなつた。

「違う、送風管だ。扇風機を上から回しても風なんか入っていかんだらう」

「でも、底が開けてあるから風、通るんじゃないんですか」

田村が言ったが、工場長は、早く送風管のセットをするように周りにいる工員に指示してから、田村に

説明した。

「熱い空気は上にあがってくるだろう。上から吹かしても、タンクの上の方に少しは行っても、あの底まで届くと思うか？」

言われてみればそうである。

「小学生でも、それくらい考えるぞ」

工場長がこの議論に終止符を打った。

送風によって、作業の苦しさは半減した。交代の

サイクルも長くなり、一時間近くも粘る者もあつた。深夜までの残業で、殆んどの被膜が除去できた。ただし、ヘラで擦り取るので、全面が虎刈りのように被膜を残した状態であつた。これを見た工場長が、「これが灯油で拭き取れたら、きれいになるんだがな」

と独り言のように言つた。これを耳にした根住が、「ヘラなんかでシコシコ擦らんでも、いつそのこと

初めから灯油で拭けば良かつたのに」

と言つた。これに對して、平林が言う。

「こんな乾いた膜は、二、三日灯油にとつぷり漬けておかんと除れやせんぞ」

「わかつとらあ、ちよつと言つてみただけよ」

根住はそう言つて冗談に紛らせた。平林は、根住の冗談のような言葉に對して、一見よけいな説明をしたようだが、根住に關しては不必要なことではない

と考えたのであつた。それには、一昨年の冬、とんでもないことがあつたからである。

工場の北側の境界は、深さ三十メートルほどの谷になつており、底を小さな谷川が流れている。その谷川までが一応工場の敷地ということになつている。谷の斜面の枯れ草刈りを命じられた工員たちは、根住の提案で山焼きのように下から火をつけたら早いということになつて、実行してしまつたのである。

火は、根住の言う通り猛烈な速さで斜面を駆け上つたが、火によつて起きた風が渦を巻き、あつという間に谷の上流や対岸にまで飛び火して、ところどころにある雑木も燃え出した。こうなると山火事である。手の施しようがなく、消防を頼んで大騒ぎの末やつと消し止めた。幸い人家などへの被害はなかったが、会社は、警察と消防から嚴重な注意を受けた。

その日工場では製造を行わず、平林は三人の主任

を伴って中川、工場長らと、主要な副材料のひとつを購入しているある大企業の工場を見学させてもらいに出かけていた。一行は、杉谷からの緊急連絡で、見学を途中で切り上げて、工場に戻ったのだった。

根住は冗談とまじめの区別がはつきりしない面があるのだ。工場の二階のタンクに繋がる二百ボルトの動力線が、番線カッターのようなもので切断されるといふ事故があつたが、これも実は根住の仕業だ

ったのだ。根住は、動力線を故意に切ったわけではないが、直径一メートルくらいの環にしてある番線を、一定の長さには何本も切る作業を二階でしていた。番線の環を壁に立てかけて、番線の環をいちいち固定せずに、パチンパチンと調子よくカッターで切っているうちに、その壁に沿って三階に上がっている電線まで切ってしまったのである。そのとき電気は流れていなかっただので、言わなければ誰も気がつか

ない。根住のそばでは、おばちゃんが短く切られた番線を揃える手伝いをしていたので、知っているのは根住とおばちゃんだけであつた。根住は、おばちゃんに口止めして、知らん顔をしていた。そのために三階に電気が来ないことで、はじめ原因がわからず、製造が大きく遅れるトラブルになつたのであつた。

被膜除去作業の翌朝、平林はタンクを覗き込みながら、工場長の独り言を思い出した。この虎刈り状態を何とかきれいにしたいと考えた平林は、全面を、工場長が言っていたように、灯油を付けたウエスで拭こうと考えた。

平林は、本社にいる工場長に電話して思いついた作業の許可を求めた。

平林が、工場での作業のすべてを、いちいち工場

長の許可を受けながらするわけではないが、この日は、トラブルのあとだから念を入れたのである。工場長は、平林の提案を聞いて、

「うーん、きれいにはなるだろうが、そこまでどうかなあ・・・虎刈りといつても、残っているのは温度がかかっていたから、完全に壁面にべたついた状態だろう。膜として取れてくることはないんじゃないか？・・・でもまあ、あんたがきれいになりたいと

言うんならやるか・・・灯油を使うんだよな。シンナーはだめだぞ・・・それから、そこに藤田がいたら、ちよつと代わつてくれ」

藤田というのは、工場で唯一溶接が出来る工員である。平林が藤田に受話器を渡すと、工場長は溶接の要領を細かくアドバイスしているようだった。ステンレスの溶接は、普通の鉄の溶接より難しい。藤田は溶接ができるといつても、講習を受けて免許を取

っているだけで、普段もそんなに溶接の機会はない。

平林は田村に、拭き取り作業の指示をした。仕上げに乾拭きするようにも付け加えた。そうすること
で、灯油に溶けた製品の色が微かに残ったところも
除去されて、拭いた面が完全にきれいになるからだ。

作業は、昨日同様送風をしながら行われた。タンク
の加温はしなかったが、昨日の温もりがまだ残つ

ている。それでなくても暑い工場で、さらにタンクの中となると尋常な暑さではない。風量を強めにして作業は行われた。

工場中が灯油臭くなつたが、タンクの内面はぴかぴかのステンレス面を見せて輝きだした。みんなは嬉しくなつて、拭き取り作業に精を出した。平林は、工場長に褒められることを想像しながら見守つた。

ただ、タンクに入つて拭き取り作業をした者の中、

二人の工員は気分が悪いと言つて、弁当を食べなかつた。平林は、風通しの良いところで少し休んで、気分が治つたら、昼休み時間が過ぎてからでもいいから、弁当を食べるように指示した。

午後はいよいよ水漏れ箇所箇所の溶接である。漏れていたのは、最初に見つかった底のほうの一箇所だけであつた。

午後一時、自分の出番を今や遅しと待ちかねてい

た藤田が、いつにもなく時間になるとすぐに立ち上がった。工場内にはまだ灯油の臭いが立ち込めていた。藤田は、溶接の道具を手際よく準備し、ゴム長、ゴムのカッパ、ゴム手袋に身を固めた。早くも、目隠しの付いたヘルメットの下から、藤田の顔には汗が流れ出している。潜水夫のような格好でタンクの底に降りて行った。藤田が狭い中でゴソゴソと自分の足場を定めていたが、やがて上に向かって、手を

振って合図した。それを見て、田村たちが溶接の道具を下ろした。

平林がタンクの底の藤田に、

「灯油の臭いは大丈夫か？」

と声をかけた。タンクの底から、

「これくらいなら大丈夫や。風が邪魔になるからちよつと止めてくれ」

と声が返ってきた。送風機のスイッチが切られた。

あたりはゴーゴーという音がなくなつて、ホツとす
るくらい静かになつた。

平林は、風を送り続けなくてもいいのか少し迷つ
た。

「藤田、ちよつと始めるのを待つてくれ」

平林は、藤田を待たせておいてから考えた。灯油は
塗装用のシンナーや、ガソリンほどの危険性はない。
しかし、揮発した灯油と空気がある比率で混ざつた

ものに火が点くと激しく爆発することがある。ただし、灯油では爆発する条件はごく限られている。

平林も危険物取扱者の講習を受けてそのことを知っていたが、念には念を入れるのが責任者の役目である。平林は、こういうとき、工場長ならどうするだろうかと思った。送風するかどうかを、工場長に聞きたいような気持ちだったが、プライドがそれを妨げた。周りでは工員たちが、平林がどのような

判断を下すのかお手並み拝見とばかりに見守っている。今朝の電話で、工場長はシンナーでなければ、あまり気にしなくてもいいようなニュアンスであったように思った。平林はもう一度藤田に確かめた。

「灯油の臭いは、風を止めても大丈夫か？」

「変化なしや。始めてもいいんだね？」

「始めてくれ」

平林は、指示を送った。

投光機に照らし出された藤田の黄色いヘルメットが、銀色に輝くタンクの中で、ひとときわ目立っている。電気溶接である。タンクをアースにするので藤田は、ゴム長、ゴム手袋にゴムのカップを着込んでいる。ヘルメット以外は真っ黒いでたちだ。それに攪拌機の羽根も製品の被膜で真っ黒いままだ。

平林は心配しながら、覗き込んでいた。溶接すべき箇所を確かめるようにしていた藤田が、

「ウエスを二、三枚投げてくれ。溶接のデコボコに灯油が溜まつてるわ」

田村が、投げ込んだウエスで、これから溶接するあたりを拭いている藤田に、

「全体にもたくさん残っているのか？」

と平林が聞いた。藤田は手袋をとってぴかぴかのステンレス面を撫で回してから、

「ああ、少しはあるけど・・・溶接するの、一箇所

だけだし、それもちよつとだけだから大丈夫だ。早いところやっつてしまおうわ」

そう言いながら。藤田はゴム手袋をして、溶接機を持った。平林は、焦った頭で考えた。自分は、

『灯油で汚れをとった後、全体を乾拭きするようにたしか田村に言ったが、今日の作業で実際にはしなかつたような気がする。そういえば、灯油で虎刈りを拭き取り終わったときに昼になつたから、昼一番

で乾拭きだなと思つた覚えがある。午後の始業で藤田が真つ先に動き出したので、乾拭きのことをすっかり忘れていた。藤田を一度上に上がらせて、乾拭きさせるべきだろうか？』

平林は迷つた。

「何を心配しとるンや。これくらいの臭い、家じやストーブ点けてるとき、いつもしとるわ、シンナーじゃないんだから」

根住が側から口を出した。

そのとき、コンコンと溶接棒で金属面を叩く音がして、溶接特有のパチパチという音とともに、青白い閃光がタンク内に不思議な輝きと、濃い影を作った。平林たちは閃光から目を逸らせた。その瞬間、ドーンと鈍い音がタンク全体に響いたかと思うと、オレンジ色の火柱がタンクの口径一杯になって天井まで上がった。平林たちはのけぞって尻餅をついた。

火柱は数秒で消え、真つ黒い煙の塊が出て静まった。タンクからは青黒い煙が少し立ち昇ぼっている。平林は、跳ね起きてタンクの底を覗き込んだ、藤田はうずくまっっているようだ。

「ふじた」

呼んでも返事がない。飛び込むように降りて行った平林は、うずくまっっている藤田の肩を叩いて、
「おい、だいじょうぶか」

と叫んだ。藤田は動かない。返事もしない。

「ふじた、ふじた」

平林は何度も呼んだが反応がない。平林は、上に向かつて、

「藤田を引っ張りあげるロープを降ろしてくれ。それから救急車」

中は狭くて、平林が藤田を抱えあげることではできない。ロープが降ろされた。平林は逆さになるような

格好で、藤田の両脇にロープを巻きつけてから、

「ひきあげてくれ」

と上の者に指示した。タンクの周りには工場中の者たちが集まってきた。救急車と聞いて、杉谷も真っ青な顔で走ってきた。藤田は、黒いカップに首を埋め込むように、だらりとした案山子のような格好で引き上げられた。タンク脇の縞鋼板のフロアに横たえられた。すぐに、おばちゃんが毛布を持って

きたので、その上に移された。藤田の顔は煤で真っ黒だ。特に鼻の穴と、半開きの口の周りが黒い。口の中の方も黒く見える。平林が藤田の胸に耳を当てた。

「心臓は動いてる」

平林は、自分に言い聞かせるように言った。

外に救急車のサイレンが近づき、止まった。白衣の救急隊員が担架を持って駆け上がってきた。みんな

なはうしろに下がって、藤田の状態を確認する隊員を取り巻いた。口を開くものはいない。救急隊員同士が短く言葉を交わして、すぐに藤田を担架に乗せた。

「責任者の方は？」

隊員のひとりが取り巻いている者たちを見回して聞いた。平林が、自分だと言つて前に出ると、

「大量に煤を吸い込んでいます。一時を争う

状況なので、一緒に来てください。事情は車の中で聞きます」

そう言つて、二人で担架を担ぐと、走るような早足で、狭い鉄階段を降り、救急車に収容した。それに続いて平林と、杉谷が乗り込んだ。救急隊員のひとり、周りの者には目もくれずに救急車の後ろの扉を閉めると、助手席に飛び乗り、救急車はサイレンを鳴らしながら走り去つた。工場の者たちは取り残

されて、みな言葉もなく立ち尽くしていた。

「なんで、もつと安全を確認してから始めませんか
つたんや」

根住がはき捨てるように言ったが、誰も答える者は
いなかった。

平林も、杉谷も救急車に乗るのは初めてだった。

藤田の側にいる隊員は、酸素吸入器を取り付け、脈

を取り、瞳孔を調べ、次から次と応急的な処置をしている。助手席の隊員は、走り始めてからずっと電話をかけている。藤田を連れて行く病院を決め、どのような状態の患者なのかを連絡しているのだ。電話がすんだ隊員が身を振じらせて、後ろを振り向いて、平林たちに状況の説明を求めた。平林は、さつきから体が震えて、聞かれたことに答えようとしても、声が出にくい。

「大きな声でお願いします」

隊員が、大きな声で言った。平林が、声を絞り出そうとして、裏返ったような声になりながら説明した。

病院に着くと、看護婦が移動用のベッドを用意して、救急口で待っていた。平林は、テレビで見たことのあるような場面の中に自分がいると思つた。藤田を乗せたベッドは救急処置室に消えた。杉谷が、すぐに公衆電話に取り付いて電話をかけ始めた。し

ばらくして処置室の廊下のベンチに座っている平林のところに戻ってきた。

「工場長に報告した。すぐこつちに来るそうだ。それから、藤田君の家にも連絡するように事務所の者に指示しといたから」

杉谷は、工員たちを君付けで呼ぶ。平林は、かえつて見下しているように思えて、あまり好きではなかつた。

「すみません」

平林はそれ以外何も言うべきことがなかつた。思考が停止している。自分でもそのことが意識できるほどだつた。

事務所では、杉谷から指示された事務員が藤田の自宅に電話を入れたが、いくら呼び出し音が鳴つても誰も出ない。もうひとりの事務員が藤田の奥さんのパート先を知っていたので、それで連絡が付いた。

工場長が、平林たちがまだ座って待っている病院の廊下に駆け込んできたのは、杉谷の連絡から一時間後だった。そこには藤田の妻の良子も先ほどから悲痛な表情で立っている。工場長を見て、杉谷が小声で、

「藤田君の奥さんです」

と教えると、工場長は真っ先に彼女の前で深々と頭を下げた。

「大変なことになってしまつて申し訳ありません。病院が最善の努力をしてくれると思うので、大丈夫でしよう。どうか、気をしつかり持つてください。われわれも出来るだけのことをするつもりですから」

と丁重に言った。普段の工場長とはまったく違う姿である。平林も杉谷も思わず身が引き締まった。ちようどそのとき、休急処置室のドアが開いて、処置

に当たっていたらしい医者がマスクをはずしながら、関係者を室内に呼び入れた。藤田の顔は、きれいになつていたが、固く目を閉じたままだ。医者が、

「大量の煤を急激に吸い込んだための窒息が原因です。火傷は大してなさっていませんでした。われわれも最善を尽くしましたが、お気の毒です」

と言つて、頭を下げた。誰も言葉がなかつた。良子がよろよるとベッドに近づき、しげしげと藤田の顔

を見ていたが、体が傾いたと思つたらその場に崩れ落ちるように座り込んでしまった。平林は、看護婦と一緒に藤田の妻を椅子に座らせた。

工場長は杉谷に目配せして、二人は部屋を出て行った。良子は、現実を認識するのに時間がかかつているのか、それとも堪えているのか、涙を見せていない。平林は、何か声をかけなければならぬと思つた。うばかりで、何を言つていいのか思いつかない。そ

の場に呆然と立っているだけだ。

凍りついたような表情でじつとしていた良子が、顔を上げて、上目遣いに平林を見上げた。目にはいっぱいの涙を湛えている。その目は、恨みに燃えているように平林には感じられた。平林が良子に会うのは初めてである。平林は、自分が何者であるか明らかにかしておくべきだと思い、半歩踏み出して、
「私は、藤田さんの上司の平林と言います。このた

びはとんだことで、もうしわけありません」
と言つて頭を下げた。そうしながらも、こんなことを言つても、いまの彼女にとって何にもならないと思つた。

「いったい何があつたんですか？」
良子は、意外に冷静な声で聞いた。

「藤田さんが、タンクの中で溶接をしているときに、底の方に残っていたガスに火が点いて・・・火はす

ぐに消えたけど煤を吸い込んでしまったということらしい……今のお医者さんが……」

平林は、藤田を死なせたのは自分だと思ひ込んでいたので、非常におどおどした言い方で、語尾は曖昧になった。

「主人は溶接してたんですか？」

良子は、平林の説明が飲み込めなかったような質問をした。平林がもう一度説明しようとしたとき、良

子は、

「いやーっ」

と部屋中に響くような叫び声をあげて、藤田の遺体にすがりついて泣きじやくり始めた。看護婦が良子に近寄って、背中をさするようになしていたが、しばらくして離れていった。

この部屋では、このような場面は日常的なことなのかも知れないと、平林はその光景を見ながら、ぼ

んやりと考えていた。平林は、壁際の椅子に気づいて、それに腰掛けた。放心したように、藤田と良子を見ていた。ただぼんやりと、何がいけなかったのだらうという言葉だけが頭の中を行き来していた。

操業中の死亡事故である、その日のうちから関係

者が警察に呼ばれ、それぞれが同じようなことを繰り返し聞かれた。警察の現場検証も入念に行われた。

平林は事情聴取で、三人の係官に取り囲まれるようにして、次から次と質問された。平林は緊張のあまり、殆んど自分の頭で考えることなしに、ただ聞かれたことに肯定か否定の返事をするとしかできなかつた。

「溶接をする前に、タンクの内面をきれいにする目

的で、ウエスに灯油を染み込ませて拭くように指示したのだね？」

「はい」

「それはあんたの判断で行った作業かね？」

「はい……いえ、工場長がそうしたらいいと言つたので……」

「工場長？」

「はい、工場長です」

「そうしたらいいと言ったのは、工場長なのだね？」

「はい」

「では、工場長の命令で、あんたが現場で作業を指示したということだね？」

「いや、命令というほどではなく、許可を得てしました」

ここまで来たとき、係官同士で何事か耳打ちしていたが、

「工場長は、平林課長が電話で、灯油で拭いてきれいにしてから溶接したいと指示を仰いできたが、それは危険だからやめるように指示したと、言っているそうだが、違うのかね？」

「やるように言われたと思っただけど……」

「どつちなんだね？」

平林は、その件で工場長に電話したとき、確かに工場長は『うーん』と言って考えていたのを思い出し

た。そのときの唇をかんだような工場長の顔まで思
い浮かべたが、そのあと、やるように言われたのか、
やめろと言われたのかを思い出せない。

「工場長がそう言うのだったら、そうだったのでは
しょう」

現場の状況などを繰り返して詳しく聞かれて、平林が
この日事情聴取から開放されたのは十時すぎだった。

平林の妻の幸子は、帰ってきた夫に遅い食事を出した。幸子は工場で大変な事故があつたことをすでに知っていた。杉谷が、事情聴取で平林が遅くなることを幸子に連絡してくれていたのだ。中学生の長男と小学生の次男が、心配そうにぼそぼそと食事する田村の側に座っている。

「テレビで事故のこと言つてたわ。藤田さんお気の毒ね」

「ああ。ニュースって、全国版か？」

「ローカル」

「『今日午後一時ごろ、福岡県××の化学品工場で爆発事故があり、タンクの中で溶接作業をしていた従業員一人が死亡しました。原因は、溶接の火花がタンクに溜まっていたガスに点火したものと見られ、警察では、工場の安全管理に問題がなかったか調べ

「ています』」

長男が、テレビのアナウンサーの口調を真似るように言った。

「また、どこかで事故があったのだと思ってぼんやり聞いてたら、お父さんの工場が写ったからびつくりしたわ」

「写真まで出たのか？」

「ええ。取材に来てたんじやないの？」

「知らん。救急車で藤田を病院に連れて行って、わしは、病院からそのまま、さつきまで警察にいたから」

「おとうさん、逮捕されるの？」

長男が聞いた。

「じゃ、牢屋に入れられる？」

次男も聞いた。

「そうじゃないけど。一応お父さんが現場の責任者

だからな」

「お父さん疲れてるから、今日はこれくらいにして
おこうね」

平林の疲れ切ったようすを見て、幸子が子供たちを
制した。

言うまでもなく幸子は、夫がどうなるのか気が気
でなかったが、本人が言わないことを聞くのを遠慮

していた。

平林は、取り乱すこともなく、自分の前にいる幸子を見て、気分が落ち着いてきた。そして、事の顛末を幸子に話し始めた。幸子に説明するというより、自分が事故に至る経過をひとつひとつ思い出そうと
していた。

工場長に電話したときに、許可されたつもりだった。しかし、工場長自身は警察に対して、『許可はし

ていない、危険だからやめろ』と言ったと証言したらしい。

平林はこの事故は結局、工場長がするなと言ったことを、自分が勝手に指示したということになって行くのだろうと感じていた。警察は、自分が言うことよりも、工場長の言ったことの方が確かだと思っているように見える。ということは、藤田を死なせたのはやはり自分だということになる。

しかし、現場の責任者として、その場において作業をすべて直接指示していたのは自分だから、たとえば工場長がどう言おうと、自分に責任があることは当然である。平林の脳裏には、ゴムのカツパに埋もれたようにぐったりとなつて引き上げられた藤田の姿や、病院での藤田の妻が泣きじゃくる姿、それに工場長の唇をかんだような表情などが次々と思ひ浮かぶのだった。

平林は業務上過失致死の疑いで逮捕され、工場は再発防止の対策が出されるまで操業停止となった。工場長は、社内的に減給処分を受けたが、法的な責任を問われることはなかった。

幸子は、拘留中の夫に面会したとき、また工場長の指示がどうだったのかを聞いた。平林は、

「現場で指示していたのは自分だから、仮に工場長が『やれ』と命令したとしても、少しでも危険だと思つたら止めさせるのが現場責任者の役割なんだ。

工場長がどう言つたかなんか問題じゃないよ」
と、事故の日に家で話したのと同じことを繰り返した。そして、

「藤田はあのかきさつさとすませたがっついていたけど、もう一度全体を乾拭きさせなかつたのが、わしの大きなミスだつた。やっぱり工場長は関係ないよ」

あのかき、自分はさんざん迷つた。たとえ無駄であつても、より安全な側の指示を出さなかつたことが、返す返すも残念である。

「でも、実際はどうだつたのですか？」

幸子は、夫の責任は免れないとしても、工場長に禁

止されたことを無視して藤田に作業させたのかどうかを知りたかった。夫がそういうことをする性格でないことを知っていたので、どうしても信じられなかったのである。それに、夫一人が悪者にされてしまひそうだったからでもある。

幸子はそれから間もないある夜、田村の自宅を訪ねて、事故のことを聞いた。田村は、

「課長が工場長にそのことで電話しとったようだけ
ど、向こうがどう言ったかまではわからん」

と言うだけで、平林が指示した作業が、許可された
ものだったのか、禁止されたものだったのかは知ら
ないようだった。しかし、田村は、

「電話のあと課長は、てきぱきと自分たちに指示し
ていたから、その様子からすると工場長が止めろと
いうことを、課長が無視して言っているようには見

えなかつたね」

とも言った。田村も、平林とは長年の同僚で、その性格はよく知っているのだ。田村は、根住なら案外何か知っているかも知れないと幸子に教えた。

幸子はその足で根住の家に行つた。根住は晩酌の入つた赤い顔で出てきた。それでも特に酔つた風でもなく、幸子に平林のことで見舞いを言つた。そして幸子の問いに対しては、

「課長には悪いけど、ちよつとまずかったかね。あのとき、実はわしも危ないんじゃないかって、課長に言うたんよ」

「それなのに主人は、構わずに続けるようにしたんですか？」

「まあ、そんな感じだったかね。何しろ一瞬のことだったし」

「主人は、作業の前に工場長さんに電話したらしい

のですけど」

「さあ、電話のことは知らんね」

ここでも幸子が確かめたかったことはわからなかった。幸子は、工場長にもじかに聞きたかったが、そこまでは踏み切れなかった。

平林の業務上過失致死罪が確定し、会社は平林を懲戒解雇した。

テレビのニュースでこの事故のことが報道されることはもうなかつたが、

『製造課長の平林光孝（四十三才）は、工場長の禁止の命令を無視して従業員に危険を承知で作業させた云々』

とする小さな記事が地方新聞に出た。

完

*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

- 1 弦楽四重奏団 a
- 2 弦楽四重奏団 b
- 3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

爆発

2022年9月30日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：www.photo-ac.com

・タイトル：工場の配管のイメージ

作者：makoto.hさん

写真のID：2098586

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
